

名治療医として村人から尊敬され称賛され、数知れぬ贈物をもらっていた私の父は、いったん家を出ると物も言えない人物と勘違いされるほど口数の少ない人間だった。父の笑う姿を私が眼にしたのは極めて稀であった。私が英語の上級試験に合格したわずか数日後この世を去った父が、生前笑った例<sup>たぐひ</sup>しはほとんどなかったと言えば人には受け入れ難いことだろうと私は思う。家庭内では苦虫を噛み潰したような人間も外ではいつも愛嬌を振りまくことがあり得るので、私がいらないところで父がどれほど寛ぎ笑っていたかは知る由もない。口数が少なく稀にしか笑みを見せない人間は、いったいいかなる思考の持ち主なのか理解し難い。

父の言行の一部を解することは私にとつてさほど難儀なことではなかった。しかしながらその大半は闇に包まれたままで、いまだによく分からないというのが本音である。父は買物に出かけると頑なに値引きするよう主張した。わずか三セントの品物でさえ、まずは一セントで交渉を始めた。次に二セントでどうかと声をかけた。自分の付け値どおりに品が手に入らないとみると今度は別の店に足を運んで同じ商品を三セントもしくは三セント半支払って購入した。小売商が二十五セント

で販売している品物を別の商人が二十セントの安値をつけていても、この商人の品を買おうとはしなかった。一ルピー<sup>2</sup>で買物した品を母が「いくらでしたか？」と尋ねると、父は「九十セントだった」と返事する。母が「安かったですね」と応えようと父は満足する。ところが逆に「高かったですね」と母のひと言が返ってくる。「いや実は一ルピーで買って来た」と苦笑いしたものである。

人夫であれ車夫であれ父の差し出す足代を不服として受け取りを拒み、さらなる額を要求すると父は激しく言い争った。父がはじめに提示した金額を渋々手のひらに収めその場を立ち去る男の背に向かつて父は「気に入らない奴だ！」と吐き捨てる。

ところが自分が支払った足代に愚痴の一つもこぼさず引き返す牛車の車夫には声をかけ、さらに十セントいや二十五セント、場合によれば五十セントものチップを勢<sup>はま</sup>んだものである。

門口に立つ物乞に母が十セントの恵みを差し出すと、父はその男の顔を凝視して「盗人に追い銭だ」と言つて母を叱責した。しかし母が「ぬすつとだ」と言つて追い返す物乞に父は時折り十セントであれ惜し気なく金を与えた。父は人の顔を見たとなんにその人間に哀れみを感じたりそうでなかったりした。父が物乞に小銭を施したり追つ払つたりしたのは、どうやら第一印象にすぎないと私は思った。けれども父の行動の一部を観察していると私のこの考えが間違っているのではないかと、ふと感じることがあった。

援助を求めて父を訪ねてくる親戚であれ父は容赦なくお灸を据えた。がみがみ叱りつけた挙げ句大事にしまつておいた生活費をすっかりそのまま彼らに手渡したこともある。

誰<sup>たがし</sup>某かが手土産を持参すると父は受け取る前に決まつて一、二度断わつた。父のこうした態度は

狡猾な手段でもなければ、伝統的な村の慣行から生じたものでもなく、ずばり物に対する執着がなかつたからである。

「何だつてこんなものを持って来るんだね……さつさと持ち帰つて」と村人を諭すかのようには話す。村人の中には父のことを素直に受けて贈物を引き下げる者もたまには見かけた。その姿を見て父が機嫌を損ねたことはかつてなく、その村人をいかさまな奴だとただせせら笑つたのだつた。

いろんな職種に手を染めたことのある父の最後の職はアーユル・ヴェエダの医療であつた。シンハラ語に加え、パリー語、サンスクリット語、そのうえ、生半可な英語を解せた父は、この医療を始めるまで石鹼を製造していた時期がある。また原綿から化粧用パフをつくつたり、ガラスに水銀を上塗りして鏡の製造実験を重ねていたこともある。さらにある時期には手工芸品の教材を自ら著作した。親指サイズにも満たないほどのガラスの小瓶を三、四百個ほど買いあさり、それらに水を半分入れ、次にアンモニア水を浸した脱脂綿を加えて蓋を閉め、一個二十セントで販売していた薬まである。これは詐欺まがいの行為なのか、それとも商品価値のあるものなのか父は無頓着でいた。この薬瓶を持ち帰り、頭痛のさいに臭いを嗅いでみたら痛みが消えたと薬の効果を報告する百通を優にこえる手紙が舞い込んだことさえある。その後雜貨品を扱つ行商をしたが、最後にたどり着いたのがアーユル・ヴェエダ治療の仕事であつた。

アーユル・ヴェエダの治療医となつた父は、もはや人を欺くことなく村人の治療で得られる微々たる収入に甘んじた。父は書物や師匠に当たる治療医から伝授された処方に基づく治療法に満足せず、新たな処方薬や治療法の開拓に精をだした。父の新薬が患者の間につけたのは見立てが上手か

ったのか、それとも患者の運が強かったのか私にはなんとも言い難い。「ジャヤセーナ・ウエダマハツテヤは全く気紛れな治療をする先生だ」と伝統的な治療法を遵守するある初老の治療医が皮肉つて言った。

父は古代の薬学書に眼をとおし、煎じ薬に用いる薬草の葉や根に含まれる効能と毒性を仔細に知っていた。そこで書物に記された煎じ薬の処方を見直し、そこから一つや二つ成分を取り除き、代わりに二つ三つ、時にはそれ以上の別の薬を調合して新たな処方箋を作りあげた。先に記したアーユル・ヴェーダの治療医が気紛れな先生だと名指したのも、こうした改竄された父の処方薬の一覽表を目通ししたからに違いない。

曾祖父の子供が精神を病んでいたその昔、アーユル・ヴェーダの治療で快復した話を私は聞いた覚えがある。また母の姉妹の一人が時々持病の癲癇の発作にみまわれたが、同様に快復したと……。私を英語学校に通わせる入学手続きをすませ、父と帰宅したその日、父は「アラウインダを医者にしなくては」と私にも聞こえるような大声で誇らし気に母に話した。父のこのことばの意味を深刻に受け止めるようになったのは十五歳をすぎた頃である。

東洋医学を手本に学んだ父が私に西洋医学を学ばせようと思ったのは、西洋医学がより優れているという通念に因るものではない。誰もがアーユル・ヴェーダ治療医より医者を尊敬したからである。父の患者の容態を見るために医者が駆けつけると、父は決まって椅子から立ちあがった。好き好んでそうした行動に走ったのではなく、患者を取り巻く家族が皆、医者姿を見て起立するので自分ひとりその場に座っているのは体裁が悪いと思つたにすぎない。また父は他人の感情を害する

ようなことばの暴力は犯さなかったが、避け難い事情があれば嫌々ながら厳しいことばを口にした。父が私を医者にしようと考えたのは、こうした理由の他に医者の高収入を念頭においていたのであり、アーユル・ヴェエダが何らかの点で劣っていると見なしたわけでは決していない。

蛙や遺体の解剖を想像するだけで私の胸はむかつき、血管が絡み合った腸の塊みたいな脳内写真を見ては嫌悪感を抱いた。ある日、医学学校への進学のために勉強している友人が、わが家に持ち込んだ大判の医学書を捲っていた時、ふと眼に止まった一枚の写真に吐き気を催した。私は単なる嫌悪感にとどまらず恐怖感を覚えた。友人はその本が学習用の教材ではなく、興味本位に図書館から借りてきた性病に関する本だと説明してくれた。梅毒に罹った男女の肉体を撮影した写真を眼にした私の嫌悪感と恐怖感がその時どれほど極限に達していたかといえば、その後しばらく女性の姿を見るのもおぞましいほどだった。

上級試験を受けるために科目を選択しなければならなくなった時、私は父の意見に逆らった。すると母まで父の片棒を担ぐように私と対立した。

「蛙や人間の死体の解剖なんかしたくない」と私は言った。「血を見るだけで頭が痛くなるし、裸の女性の遺体に触れるのだから僕は嫌だ」

上半身裸の父が客間の椅子に寛いだ様子で座っていた。小テーブルのそばに立っていた母のすぐ横に私がいた。沈みゆく陽の光がジャンプの木の葉をブロンズ色に染め、木陰は手前から庭の向こう側の端まで長く尾を引いて延びていた。話を聞いてもらいたかったのは父ではなく母の方であった。